

長崎平和祈念公園を訪れ、見て思ったこと

8月を迎え、原爆投下、終戦に想う時節を迎えました。

3年前に、長崎を訪れる機会をいただきました。中華街に足を向ける前に、やはり行っておかなければいけないと思い立ち、30数年ぶりに平和祈念公園を訪れました。

公園の入り口には、「のどがかわいてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて とうとう油の浮いたまま飲みました」と被爆した少女の手記が刻まれていました。

長崎の平和祈念公園は、もともと刑務所があった場所で、受刑者や職員・住居者、中国人や朝鮮人含む約135人全員が即死したそうです。静かで穏やかな空間でしたが、言い知れぬ緊張感を感じました。

園内を歩いていると、各国から寄せられた平和を願うモニュメントが立ち並んでいましたが、その中に旧ソビエト連邦共和国から送られた塔が目に入ってきました。ウクライナとの戦争で核兵器の使用をほのめかすロシアのことを思うと、何とも言いようのない気持ちになりました。

核兵器の恐ろしさはだれもが知っていることです。だからこそ、力を持つ国は、核兵器によって攻撃されることを恐れ、核兵器を保有しようとします。いわゆる「核抑止力」です。強さ、力を誇示することによって相手を黙らせるというのが抑止力です。今世界は、この「核抑止力」によって均衡が保たれていると言ってもよいのかもしれませんが。日本は核兵器を保有していないと言っても、間違いなくアメリカの核抑止力の中にありますし、有識者の核兵器を保有すべきであるとの意見が報道されています。現在進行中の、アメリカ・イスラエルによるイランとの戦争も、テーマはイランの核保有を阻止するということです。

この力をもって相手を脅かすこと、これが世界と人間の現実なのかもしれませんが、私たちはその「いびつさ」と罪悪性を考えることなく日々を過ごしています。

長崎平和祈念公園。悲しみに満ちたこういう場所を訪れると、普段は忘れてしまっている、人間の悪の現実を考えさせられます。